

---

# 欲望の報復

テイスティ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

欲望の報復

### 【Nコード】

N0446B

### 【作者名】

テイステイ

### 【あらすじ】

石山隆介に残された時間は、あと数ヶ月。おのれの欲望に翻弄されて終わる人生の最後の日々に、隆介は、順子という在日韓国人の女性との愛の軌跡を辿り始める。寄せては返す波のように、生まれては消えていく人の定め of 儂さをBGMに、それでも尚、人を愛することではしか生きた証を残せない人間の悲しさ・尊さをうたう。

## 第1章

石山隆介は、ようやく痛みから解放され、深い脱力感の中、虚ろな眼差して窓の外を見遣った。

「新緑の季節は、これで見納めだな」・・・。  
諦観しているつもりでも、胸に迫り来るものがあつた。

海を見下ろす高台のホスピスに入って2週間になる。

わずかの間に、入所時に顔見知りになつたうちの2人が旅立っていった。

「順番にだんだんいなくなるわね。でも怖がらないで。死ぬことは終りじゃないのよ。」

検査でストレッチャーに横たわっている時、すれ違いざまに車椅子の女が言った。

「自分ひとり、達観した気でいやがる」

・・・そういうわかつたようなことを人前で口にする奴を、昔からずっと軽蔑していた。

病院にいた頃は、日に十数組の来客があり、花もふんだんに飾られていて賑やかだった。

秘書の中井に仕事の指示を与えたり、議員仲間から相談をもちかけられたり、実際に動くことはできない身ではあつたが、必要とされる充足感があつた。

しかし、ここに来てからは、訪れる見舞い客もめっきり減った。

来てくれたところで、応対する元気もなくなっているのだが、それでも訪ねてくれる人が減るといっなのは、見捨てられたような気がして、自分で決めたこととはいえ辛いものがある。

振り返る今までの人生で、ここまでの寂しさを味わったことはなかった。

グツと瞼を閉じると、目から伝い落ちた涙が耳のくぼみに溜まって、顔を動かすと耳の奥にツーンと生暖かいものが流れ込んできた。

隆介は、末期のすい臓ガンを患っている。既に「余命は長くて3ヶ月」と宣告されていた。

ここに入った時点で、社会的には死んだもの・・・と見なされるのかもしれない。

金で命が買えるのなら、ブルド・ザ・で何台分でも掻き集めてきてやるのだが、如何せん、もはや手遅れだ。

今の自分には、金なんて紙くず同然。何の役にも立たない。

ここは、完全看護で付き添いは不要だが、本来ならば、そばでかいがいしく世話を焼いてくれるはずの連れ合いも、他の病院に入院している。

妻といえは聞こえはいいが、我々の間には、世間でいうところの“夫婦の絆”とか“夫婦の情愛”なぞというものは、とうに・・・と

いつか、そもそも初めから介在していない。

お互いが計算ずくの思惑があって一緒になっただけで、当初から、愛とか責任とか、気の滅入るようなものをしよいこんで歩く気はサラサラなかった。

互いに2度目の結婚だったし、子供も持たなかったから、実質的には独身と同じ自由な生活が続けられた。

わざわざ入籍したことの利点は、相手が所有するものを、相互に公然と有効利用できるということだった。

つまりは、俺の社会的名声と、あいつの金……。

## 第2章

石山悦子は、慢性腎不全のため透析が欠かせなかった。

週3日、一回4時間の治療のせいで、日常生活の自由裁量度が極端に落ちていた。

“主人も、もうすぐ逝く。何としても元気にならねば・・・”  
焦りはつのる一方だった。

だが、ようやく“多少のリスクをおかしてでも、移植を考えよう”と決意を固め、間もなく医師と共に訪中する予定をとりつけるところまでこぎつけた。

中国のコーディネーターからOKの連絡が入り次第、出発できるように、現在は入院して体調管理に万全を期している。

死刑囚が臓器提供者の大半を占めると知って、一瞬、たじろいだ悦子だったが、すぐに気を取り直して、臓器を買える時代の到来と自分の豊かな境遇に、心から感謝したのだった。

悦子の母は、父の死後、保険の外交員をしながら、悦子を短大まで進学させてくれたが、長く肝臓を患った拳句、若くして亡くなった。

お金と力がないがために治療の選択余地は限られ、最小限度のおざなりな治療のベルトコンベアに乗せられたまま、帰らぬ人となった。

悦子は、前の夫と8年前に死別している。

中堅商社の社長であった前夫とは20歳も年が離れていた上、前妻との間に男の子もおり、それなりに苦労もしたが、夫が亡くなった時には、一生遊んで暮らせて、それでもお釣りのくる位の財産が残った。

それに、“退屈しのぎ”と称して、料亭・セレクトショップ・・と、興味のおもむくままに事業提案をすると、夫は、二つ返事で資金を出してくれた。

もともと、ハングリ-精神が旺盛で機転の利く悦子は、与えられたチャンスを大事に育て、開花させていった。

夫亡き後、実業界の親睦パーティで出会った隆介とは、すぐに意気投合した。

隆介は、大手商社を脱サラ後、衆議院議員の秘書を経て、市議会議員3期目。油が乗り切っている時期だった。

次のステップは県議会議員・・と、一段高い目標が視野に入ってきた時、ふたりは入籍した。

悦子は、隆介の中に“貪欲さと孤独”という、自分と同じ匂いを嗅いでいた。

.....

香川順子は、石山隆介の秘書と名乗る中井の訪問に驚いていた。

隆介とは7年前に別れて以来、もう2度と会うこともないだろうと  
思っていたのに「一度だけでいいから、是非会って欲しい」と言っ  
てきたからだ。

中井の説明で、事の成り行きの大筋は理解できたが、重い病気を患  
っているとはいえ、隆介に対しては、人生を翻弄されたという被害  
者意識が未だにくすぶっている。

隆介と2度出合い、2度捨てられた苦い記憶が、生々しく蘇ってく  
る。

### 第3章

順子は、在日韓国人が集まって住む大阪の下町で生まれた。

祖父母は、在日1世で、戦争や言葉で大変な苦勞をしたというが、父母は、日本で教育を受け、流暢に日本語を話した。

夫婦で焼き肉店を切り盛りし、父は、民団の支部団長も務め、店には、その関係の人も頻繁に出入りして繁盛していた。

順子は、2人の兄弟と店を手伝いながら、府立高校の定時制に通った。

そして、その高校の全日制の1年先輩には隆介が在籍していた。テニス部の昼・夜間部合同の親睦会で二人は出会った。

キリツとした端正な美貌の順子に、隆介は一目ぼれだった。

順子も、部員を束ねるリーダーとしての資質に秀でた隆介に、強く惹かれた。

そして、二人に『太陽の季節』が始まった。

2年後、成績のよい隆介は、東京の有名私大に現役合格し、順子もその1年後、隆介を追って上京した。

昼はデパートの化粧品売り場で働き、夕方、買い物袋を下げて、足しげく隆介のもとを訪れては、まめまめしく世話を焼く順子だった。

口には出さないまでも、将来を誓い合った仲だと、順子は信じていた。

やがて、隆介が商社に就職し、出張や接待ですれ違いが重なり始め、ふたりの関係は微妙に変化していった。

そして、ある日、唐突に「順子、オレ、結婚するワ。何も言わんと行かせて欲しい」と、隆介から電話があった。

「やっぱり・・・」

漠然とした不安が、突然、現実となった衝撃で、順子は言葉が出なかった。

だけど、順子は、去っていく男を追いかけたりするほど不毛なことはないと知っていた。

「終りだわ・・・」

潔く観念しようとして心に決めた。

在日ゆえに、世間から差別されたり裏切られたりする、血と涙の理不尽な世界に長く身を置いてきた。

だから、どんな辛いことにも必ず終りがあるということ、身をもつて知っていた。

3日3晩泣き明かした後、順子は、ふっきれたように夜の街へ羽ばたいていった。

さなぎから脱皮した蝶は、ネオンが織り成す華麗な銀座の世界へと  
飛び立っていったのだった。

## 第4章

順子のいる店には、一流の人間が通ってきた。

単なる金持ちを超えて、社会的にも人間的にも「さすが・・・」と唸るような人物が集まった。

マスコミにも名の知れたママから、接客のイロハを教え込まれ、自信でも懸命に研鑽に励んだおかげで、順子は店でも1・2位を争う売れっ子ホステスに成長していった。

世の中で、一流の階段を昇っていく人には独特の匂いがする。

誠実、義理人情に厚い、謙虚、豪放磊落・・・人の目に映る個性は千差万別ながら、上流の人間が放つ芳香は、その世界に慣れ親しんだ人間にしかわからない。

貧しいアヒルの子が美しい白鳥に変身していくような人生の変遷の中で、順子は、もはや隆介の面影さえ思い出さなくなっていた。

そんなある日、パチンコ業界では最大手といわれるチェーン店のオーナーの席に呼ばれた。

そして、創業者の翁の隣で接待客と談笑する青年と目が合った瞬間、順子の身体には強烈な電流で貫かれた。

体内の血が、ドクンドクンと沸き立っていた。

日本人が手を染めたがらないグレーゾーンの多いパチンコビジネスの世界で、会長から全権を委任され、果敢に旧弊をぶっ壊していく業界の荒くれ男・・・韓 泰俊

パチンコ店内に禁煙フロアを作り、景品コーナーに免税店顔負けの高級ブランド品を揃える・・・。

噂には聞いていたが、その辣腕ぶりを物語るように、目の前の精悍な横顔には底知れぬ野心が写し出されていた。

そして、民族の血のプライドを思い出させてくれる“極上の匂い”。

順子は、あっけなく恋に落ちた。

順子と泰俊が共に暮らすようになって、2年の月日が流れた。

その間、楽しいことも沢山あった一方で、在日としての思想的な違い、親族の執拗な関与、帰化の問題、お金の工面など、2人の間に小さな争いが絶えなかった。

やがて、泰俊は頻繁に外泊するようになり、順子は鬱屈した精神状態の中で、現状に限界を感じ始めていた。

そんな矢先、大阪で市議会議員に転身していた隆介が、連れを伴って店に現れた。

順子のその後を知ってか、はたまた偶然か……。  
いずれにしても、順子の干からびた心に、隆介のやさしい一言一言  
が絡みつき、染みとおっていった。

「癒されたい・・・」

順子は、また再び、抹消したはずの過去に吸い寄せられたいった。

## 第5章

隆介は、公務員の父・良介、母・節子、妹の典型的な中流家庭で育った。

男の子は、父親との葛藤を乗り越えて大人になっていくというのが、隆介にとっての良介の存在は、ぶつかっていく対象とはなりえなかった。

良介は、酒もタバコもやらず、夜は余程の事がない限り、6時には帰宅した。

夕食後は、歴史書を読み、10時半キツカリに養命酒をほんの少し飲んで寝る。

そして、そんな判で押したような生活の繰り返しに飽きなかった。

隆介は、良介を黒沢明監督の『生きる』に出てくる老いた役所の職員とそっくりだと思っていた。

ただひとつ違うところは、映画の主人公は、死ぬまでの最後の日々に自分の生きた証を残したいと奮い立ったが、良介はそれさえもしなかったという点だ。

良介の最後のポストは、区役所の生活福祉課長だったが、その頃の区内は同和問題で大きく揺れていた。

ある時、役所の同和対策に苦情が寄せられたが、良介は問題を直視しようとせず、のらりくらりと言い逃れをした拳句、定時に退所し帰宅した。

その後、抗議団体が、家まで押しかけてきた。

そして、情けない事だが、吊るし上げられている良介を修羅場から救い、その場を収めたのは、必死の面持ちで説得にのぞんだ母・節子だった。

団長と母が対峙したあの時の切迫した奇異な光景を、隆介は今も忘れられない。

節子は、良介に言われるままの忍従の日々を生きてきた。

延々と、退屈な夫の身の回りの世話をし、黙々と家事をこなして2人の子供を育ててきた。

女性としての最盛期を、紅をつけることもなく、髪をひつつめ、荒れた手で家事に明け暮れた。

良介が脳梗塞で寝たきりになってから7年間、ずっと付き添って最後を看取り、ようやく自由になったのも束の間、去年、心不全で亡くなった。

遺品を整理していて、鏡台の奥から半分が切り取られた写真が出て来た。

口紅をして長い髪の母が、誰かと手をつないで楽しそうに笑っていた。

隆介の最初の結婚は、順子と別れて3カ月後だった。

相手は、上司の紹介で、取引先メーカーの社長令嬢だった。

彼女は若く美しく、明るく聡明だった。

一緒にいるだけで、将来の展望が開けていくような気がした。

順子を嫌いになったわけではない。

だが、その時の隆介には、確実な明日の希望が必要だった。

しかし、そうやって一緒になって7年目のある日、妻から離婚を切り出された。

「すれ違いが続いて、気持ちが悪くなってしまった」とは、表向きの理由で、実際は、義父の熱望する子供ができなかったことと、隆介の異性関係だった。

「おやじのくだらん人生を反面教師にして、ここまでやってきたんだ。今更、愛がどうのこうのなんてぬかすバカ女なんか、こちらから願い下げだ。それより、次の県議会議員選には、もっと金の工面ができる女が必要だな」

隆介は、通天閣を見上げながら、一気にグラスのバーボンを飲み干した。

## 第6章

悦子は、中井を見ていて可笑しかった。

中井は、隆介が病気になってからというもの、どんどん厚顔無恥になっていった。

隆介が元気だった頃は、悦子にも慇懃な物腰で接していたのが、次第にぞんざいになり、最近では、露骨に言い寄ってきたりする。

「先生の跡を僕が継いで奥さんと組めば、行く手に敵なしですよ」などと不埒なことを平気で口にする。

一口に秘書といっても、打てば響くような頭脳明晰な若手から、中井のように愚鈍なくせに自信過剰で鼻持ちならない輩まで、ピンキリなのだ。

中井は、隆介よりも10歳年下で、大学の後輩という安心感も手伝って、10年以上も主従関係が続いている。

中井は、隆介に言わせれば「駄馬以下の男」だったが、そんな男にも野心があった。

でも、隆介と言う強烈な個性の一冊しか読まなかった中井は、単純に隆介をバイブル視しただけで、隆介がどれほど自分と次元の違う思考回路をもった、非凡な男なのかわかっていなかった。

この世で、一番恐ろしいのは、こういった身の程知らずの無知なのだ。

さて、悦子が落ちないので失望の色を隠せない中井だったが、間もなく次なる獲物を見つけてきたようだった。

隆介が以前付き合っていた順子とかいうシングルマザーらしいが、一体どう料理しようというのだろうか？

悦子は、自分の身体がドナー待ちなどという大変な時期でもあり、ここは黙って静観を決め込むことにした。

.....

順子は、隆介の見舞いに行くことに同意したものの、中井のさらなる提案には仰天した。

息子の昇平は、今年6歳。小学校に行く年になった。  
泰俊の子だ。認知してもらっている。

実は、泰俊と7年前に別れる前後、隆介と付き合っていた時期が少しだけあった。

お互い、伴侶と別れたり、うまくいってなかったりして寂しかったのだ。

そして、傷口を舐めあうようにして痛手を癒しながら、順子はもう一度、隆介とやり直したいと願うようになっていった。

だが、やがて隆介は、一方的に「悦子と一緒になる」と言って去っていき、順子は再び一人取り残された。  
・・・と思った。しかし、本当はそんな弱音を吐いている場合にはなかったのだ。

順子のお腹には既に新しい命が息づいており、感傷に浸ったり躊躇している暇はなかった。

誰にも告げず実家に戻り、母の親戚の家で男児を出産した。

「昇平ちゃんが遺産をもらえたら、随分と生活も楽になりますよ。韓さんからの養育費だけじゃ、これからの教育費が足りないでしょう？ 僕も順子さんを守りたい。先生に裏切られて悲しむあなたをずっと見てきました。先生は、順子さんに謝罪するべきです。DNA鑑定が必要というのなら、その書類は僕が用意できます。とにかく、昇平ちゃんが先生の忘れ形見だと、順子さんから先生に言ってみてください」

それって、犯罪じゃないの？ 詐欺？ うまくいく訳ないわ・・・。

順子の心は、背徳の後ろめたさに震えた。

・・・でも、私は、隆介を愛しても尽くしても突き放されてきた。2度も捨てられて、これでもか・・・って言うほど惨めだった。謝罪してもらおう権利くらいはある筈よ。・・・

最後に順子を決意させたのは、今なお燃え残る隆介への愛憎だった。

## 第7章

隆介は無性に順子に逢いたかった。

謝ったり、別れを惜しんだりの感傷からではない。

第一、順子を騙したことなど一度もない。

「俺は、自分のことにしか興味を持たない冷たい人間だから、それがお前の負担になるようだったら別れよう」と、いつも順子に言ってきた。

順子も自己責任で、俺の勝手を受け入れてくれたと思っている。

順子の透き通るような白い肌と、その肌を這う血管から滲み出す郷愁を誘うような甘い香り……俺は、それをこよなく愛し、同時に嫌悪した。

だが、今ようやく、俺が何者で、なぜ順子という一人の女が俺の人生に執拗に関わり続けたのか……謎を解く糸口が見えてきた。

隆介は、父の良介を心底、軽蔑していた。

だから、母の残した半分に破られた写真に、ずっとこだわりの続けた。

「俺には、父と違う別の血が流れている」・・・いつの頃からか、そう確信するようになっていた。

頭の中で、若かりし日の母が顔の分からない相手と幸せそうに手をつないだ写真と、民団の代表と母との劇的な対面シーンが重なってくる。

多分、あの時、母の目には涙が宿っていたように思う。

相手の男も、こぶしを握り締めて微動だにせず、尋常じゃなかった。

人生の総括という意味でも、真相を解明する必要があった。

そして今日、金に糸目をつけずに興信所に調べさせた結果があがってきた。

俺の父は、おそらく高い確率で、韓 泰栄だろう。

在日韓国人の間では、リ・ダ・的存在として有名な人だったらしい。

手広く精肉業を営み、その金と影響力をバックに同胞の経済的自立を支援し、政治的にも相当ラディカルに動いていたらしい。

母との接点は定かではないが、ふたつの家族が住んでいた場所が、とても近接していた一時期がある。

何かのきっかけで恋仲になった二人は、当時の人種差別の因襲の下、無理やり引き裂かれ、事実を隠蔽するために別々の人生を強要されたのではなからうか？・・・

そして、身ごもった母を、有無を言わせる間もなく凡庸な父の元に嫁がせ、夫婦の第一子として俺がうまれた・・・  
そんな稚拙な筋書きがでっち上げられたらどううことは、想像に難くない。

でなければ、実業家で富裕だった母の実家が、貧しい官吏の家へ娘を嫁がせるなんてことはありえない。

そして、それが真実であればこそ、その後の母の父への徹底した忍従が、懺悔の証だったと納得できるというもんだ。

いずれにせよ、古い話で詳細は憶測の域を出ないけれども、これで俺には、他に兄弟がいたことが、ほぼ確実になった。

韓 泰栄には、妻との間に二男二女がいて、長男は韓 泰俊といっ  
た。

かつて、順子の内縁の夫だった男だ。

店で、2・3度見かけたことがあるが、口は笑っていても眼は鋭く、あいつの横を通る時、やけにテンションが上がったのを覚えている。

あいつが、俺の腹違いの弟とはな・・・

順子は何というだろう？

あいつと俺が似ている・・・などと言っただろうか？

隆介は、ふっくと小さく息をして、疲れた目を閉じた。

## 第8章

順子は病室の前で逡巡していた。あれから、ここに来るまで迷いに迷った。

しかし、中井に「もう、この機を逃したら、まともに話ができる時がないかもしれませんよ」と追い詰められて、意を決して出てきた。

だが、いざという段になると、また迷い始めたのだった。

でも「往生際が悪いですね」と不機嫌になった中井に強引に押される形で、遂にドアの把手に手をかけた。

間近かで見える隆介は、もはや、順子の知っている隆介ではなかった。

かつて生気に溢れ、皮脂で潤っていた肌は青白くたるみ、人を射すくめるような強い光を放っていた眼は、どんよりと曇っていた。

隆介は、順子が見下ろせる位置まできても、少しの間、虚ろな視線を空に泳がせていたが、やがて「やあ」と微笑んだ。

そして、若干しわがれてはいるが懐かしい声で「順子、ありがとう」と言った。

手をとって、少しずつ話し始めると、順子は、どうしようもなく悲しくて居たたまれなくなった。

四半世紀以上もの間、ずっと好きだった人間が消えようとしている。  
・その残酷な事実を目の前に突きつけられて混乱していた。

隆介を失うと同時に、隆介の影のように共に生きてきた自分の人生も消えていく・・・

深い喪失感が順子を打ちのめしていた。

そして、今までの恨みや怒り、ここに来た目的・・・全ての記憶と思考がスッポリと頭から消え去っていった。

隆介は、親よりも誰よりも、順子の人生に長く深くコミットした唯一の人間だった。

順子は、この期に及んでようやく、隆介が自分の分身に近い、最もいとおしい存在だったのだと理解した。

・・・「どんなに邪険にされても裏切られても、私はこの人を許せた。この人が、何を考え何を望んでいるのか、手に取るようにわかっていたから。だから、どんなに辛くても行かせてあげられた。そして、いつか必ず私の元に戻ってきてくれると信じて、ずっとずっと待ち続けていた・・・」

順子の中で、激しい感情が堰を切ったように溢れ出し、全身の細胞がしゃくりあげ始めた。

そんな順子をなだめるかのように、隆介は順子の手を撫で、瘦せたもう一方の手で、弱々しくベッドの上を叩いた。

順子が、涙で濡れた目で「なに？」と問いかけると、隆介は目を細めながら、もう一度ベッドの上をトントンと叩いた。

「一緒に横になるの？　大丈夫？　いいの？」

順子は、痛み止めの点滴チューブを慎重に避けながら、ゆっくりと隆介の傍に横たわった。

不思議な気持ちだった。

こんなに優しい気持ちで隆介と向かい合える日が訪れるなんて、嘘のようだった。

やがて、隆介がかすれる声で言った。「歌って。昔、二人で歌ったあの歌」

高校時代、隆介と一緒にいた時は、よく二人でカ・ペンタ・イズの『青春の輝き』を歌った。

手をつないで散歩しながら、公園のベンチで隆介に膝枕をしてあげながら、何十回何百回、歌ったことだろう。

「どうかもう一度、私を抱いて、そしてキスして!」・・・溢れる涙でシーツをグシャグシャにしながら、順子は繰り返し心の中で叫び続けていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

数十分後、中井はドアを開けて、順子がベッドで歌を歌いながら隆介の髪を撫でているシーンに出くわし、一瞬驚いたが、そのまま静かにドアを閉めた。

「よっしやあ〜! 作戦完了!」

中井は踊る心を抑えながら、病室から少し離れた自動販売機が置かれているラウンジで、順子が出てくるのを今か今かと待っていた。

## 第9章

順子は、隆介に「必ず、また来るからね」と言い残して病室を後にした。

隆介は、相変わらず柔和な顔で笑っていたが、その目は深い悲しみを湛えて、最後の別れを告げていた。

隆介の目は、いつも口以上に雄弁に彼の心を物語った。

順子を愛する時も、そして裏切る時も……。

それは、泰俊も同じだった。

「好きになった男は、私の胸に熱いマグマを残して消えていく。そして、その桎梏の中で、私は焼き尽くされていく」……。

順子は、嗚咽をこらえながら、やっとの思いでラウンジに辿り着き椅子に座った途端、テ・ブルにひれ伏して泣き崩れた。

中井は、順子に近づくと、肩に手を置いて優しく声をかけた。

「順子さん、よく頑張って耐えましたね。辛かったですでしょう。でも先生は、あなたに財産を残せて本望だと思いますよ。誰よりも順子さんを深く愛してらっしゃったんですから。」

これで、昇平ちゃんをいい環境で育てられるし、順子さんも幸せに暮らせる。これからは、僕にも是非、お手伝いさせて下さい。

そくだ！ 今日みんなで食事にも行きませんか？」

しかし、顔を上げた順子の一言に、中井の表情は凍りついた。

“エッ？ 何だつて？ 一緒にベットで子守唄まで歌ってやって、肝心な事は言わなかったつて？！ どこまでマヌケな女なんだ！ 何のために、気色悪い半死人とベットに横たわってたんだ？ 一体、俺の骨折りを何と思つてやがるんだ！！”

だが、中井は怒り狂う気持ちをグッと抑えて言った。

「順子さんが、なぜ先生にあれ程愛されていたか、わかるような気がしますよ。貴方は、本当に心の綺麗な方だ。そんな貴方に、先生を騙すようなことを言わそうとした僕が悪かったです。 だけど、忘れないで下さい。僕は、順子さんに幸せになつて欲しかったんです。 貴方には、僕のできることだつたら何でもしてあげたいんだ。」

この件は、もう僕に全て任せて下さい。順子さんが悲しむようなことは絶対にしません。これからは、僕が順子さんを守ります」

順子が帰った後、中井は腕組みをし、神妙な顔で自動販売機のまじいコ-ヒ-を飲んでいた。

“順子はアホな女だが、心底、自分を愛してくれていたと知ったら、先生はどうするだろうか。”

法定相続を度外視しても、順子と昇平のために金を残してやりたいと思うだろう。

公正証書の遺贈であれば、悦子が遺留分の減殺請求をしたとしても、最大で半分の遺産が転がり込む。俺は、順子と一緒にあって、その金をもとに市議会議員選に打って出る。弔い合戦なら、先生の威光が残っているうちが勝負だ。十分に勝算はある！”

そこまでのシナリオを頭に描いたところで、中井は、隆介の病室に  
とって返し、厳粛な面持ちで告げた。

「先生、順子さんのお子さん、つまり昇平君は先生のお世継ぎです。  
もし鑑定が必要なら・・・」

中井が話し始めたのを制するように、隆介は片手を押し出し、はっ  
きりとした口調で言った。

「わかっている。 弁護士の先生に来てもらってくれ。 できる  
だけ早くだ。」

中井は「ハッ！」とかしこまって一礼をして病室を辞すと、転がる  
ように走って事務所に急いだ。

喜びと期待で、胸がはちきれそうだった。

## 第10章

隆介の葬儀は盛大なものだった。

沢山の政財界関係者・支援者が次々と訪れ、腕章をした地方版担当の新聞記者やカメラマンが行き交った。

悦子は、点滴チューブをつけたまま、丁寧に参列者に対応して『気丈な未亡人』と人々の同情を集めていた。

順子は、人目につかぬように手早く記帳を済まし、うつむき加減に歩き出したところで、背後から声をかけられた。

「失礼ですが、先程お名前を拝見いたしました。香川順子さんでらっしゃいますね？」

「はい」とうなずくと、男は「私は以前、先生の秘書をしております。田口と申します。先生から生前、香川様に直接手渡しするようにと書状を預かっておりました」と言っ、一通の封書を差し出した。

順子は、それが隆介の遺書だと見てとると、丁寧に御礼を言っ手紙を受け取った。そして、焼香を済ませると、電車を乗り継いで、遠い昔、隆介とよくデートした川沿いの公園を訪れた。

肌を刺すような日差しと、暑さを煽るような蝉の鳴き声とで、順子は眩暈がしそうだったが、ペットボトルのお茶を一口飲み深呼吸をした後、手紙を読み始めた。

.....

順子へ

君が、この手紙を読む頃には、当然のことながら、僕はこの世にいない。

あの世があればいいのだけれど、こればかりは死んでみないとわからない。

行き場所があるのかどうか、少し不安だよ。

生きている間、君には本当に世話になった。

今更、弁解するつもりはないが、君は僕のせいで、随分と悲しんだり苦しんだりしたんだろうと思う。

どうか、許して欲しい。

君の前では、僕は赤子のように無防備でいれた。

君は、僕が無理を言って怒らせても、最後はいつも許してくれた。

僕は、そんな君に甘えているうちに、それが当然だと慢心して、ますます君に多くの犠牲を強いた。

どんなに君が傷ついていたか・・・なんて考えずにね。

とんだ、わがまま坊主だった。

実際、僕は強く生きたいと思ってガムシヤラに突っ走っていた頃、

目的のためには手段を選ばなかった。  
ささやかな幸せを望む内なる声に耳をふさいで、君を容赦なく切り捨てた。

だけど、僕の魂は、いつも孤独地獄でのたうちまわってた。ずっと、ヒリヒリするくらい寂しかったんだ。

病気になって、いよいよ死が近づいてくるのがわかるようになって初めて、君を手放したことを後悔した。

本当に、僕ってバカだよな。

結局、僕という男は、君にとって害悪以外の何ものでもなかったけれど、最後に少しだけ、償いの気持ちをごめて、君の将来に経済的な援助をさせてもらえればと思う。

詳しくは、弁護士の方に預けてあるから、それに従って欲しい。

それから、今後の君の人生について、もしアドバイスが必要なら、中井よりも悦子に相談したまえ。  
中井などよりあいつの方が、ずっと君の役に立つはずだ。

それと、終幕を飾るハッピー・なニュースをひとつ、残していきたい。

君の前のご亭主だった韓 泰俊は、僕の腹違いの弟らしい。  
とすれば、昇平君は僕の甥ということになる。

信じられないって？

僕も始めはそうだった。

でも、僕と君は、そういう見えない糸で、ずっと結ばれていたのかもしれない。

さあ、もうそろそろ喋りすぎて限界だ。

では、君のこれからの人生に幸多かれと祈っている。

石山 隆介

追伸

これは余談になるが、僕は、非閉塞性無精子症という病気で、医者から「奇跡でも起こらない限り、子供はできない」と言われていたんだ。

だから、昇平君と僕が、君を介して同じ血を共有していると知って飛び上がるほど嬉しかったよ。

君の手で、りっぱに育ててやってくれ。

では、順子、今度は本当に お別れだ……

## 第11章

悦子は、隆介の葬儀を終えて、疲れてはいたがホッとしていた。

点滴は余分な演出だったかもしれないが、将来的には“けなげな妻”という印象を周囲に記憶させるのに役立つたと思う。

・・・『自身も病を抱え、夫の死に打ちしがれる妻。しかし、夫亡き後は、気持ちを奮い立たせて真正面から病と向き合い、克服。その後は、亡夫の遺志を継ぐべく政界に進出し、自己の移植体験をもとに臓器移植法案の改正に尽力。そして・・・』

・・・悦子の自画像パズルは、ワンピースづつ着実に埋められ、やがて達成感と共に完成する予定だった。

ところが、このところ、産業廃棄物処理施設の設置許可を巡り、地検が動き出した模様で、業者や役所に事情聴取が入り始めた。

悦子は、この件に、隆介を含めて数名の議員が関与していたことを知っている。

だが、こういったケースでは、摘発されて衆目に晒されるのは氷山の一角だけなのだ。

大抵、一番弱い者がスケ・プゴ・トに仕立てられ、全貌は解明されないまま“悪人ほどよく笑う”の図式で終わる。

今回の場合は、もはや物言わぬ隆介に、全ての罪がきせられることになるだろう。

しかし、隆介の栄光の失墜は、悦子の次なるシナリオにとって大きなダメージだ。

隆介は、若く、一途に闘った、栄えある政治家でなければならない。

「いよいよ、中井を使う時がきた・・・」

中井名義の通帳が、銀行の貸し金庫に入っている。

贈賄側からの入金、他の議員の便宜に対する謝礼等が、漏らさず記載されている。

実際の金のやりとりに関与したのは、以前に秘書だった田口だったが、彼は既に多大な報酬と共に手を引いていた。

「私設秘書というのは、詰まるところ、政治家の緊急時の盾として

存在する」と、隆介はいつも言っていた。  
だとしたら、中井には、今こそ、その職責を果たしてもらわなければならぬ。

“隆介の遺産の問題に関しても、何や画策していたようだし、どうも胡散臭い

。それに、自分が隆介の地盤を継ごうなんて、思い上がりもはなはだしい。

ともあれ、例の通帳から少し、金を引き出して中井に与えてみよう。迅速に着服の事実を積み重ねていかないと、時間切れになってしまう。  
”

悦子の頭の中で、非常ランプが点滅し始めた。

## 第12章

それにしても、あの順子という女には驚いた。

隆介の遺書を持ってやってきて、いきなり「昇平と隆介さんがどう  
いう関係かということとは別に、純粹に私に投資していただけない  
でしょうか？」決して損はさせません」と言ったのだ。

そして「5000万円の遺贈分とは別に、北新地に店をもたせて下  
さい」だって？

“法外もいいとこだ”・・・悦子はあきれた。

しかし、順子は、そんな悦子を見透かしたように言った。

「ご挨拶がわりです。何かのお役に立つようでしたらお使い下さい」  
そして、中井とのやり取りを収めたレコーダーを差し出した。

“確か、銀座のクラブで働いていたと聞いていたけれど、結構やる  
わね”

順子のしたたかさに、悦子は舌を巻いていた。

政治的な触覚と相手のニーズを探し出す嗅覚は、並じゃない。度胸もすわっている。

“あの女に出資してみようか・・・”

悦子は、順子に不思議な親近感を抱き始めていた。

『彼女なら、店に来た議員連中や地元の経営者たちから、旬な情報をうまくすくい上げてくるだろう。』

それに、私には子供がいない。隆介の甥だという昇平とやらいう子も、意外なところで役に立つかもしれない・・・』

ちみもつりょう  
魑魅魍魎が闊歩する政治の世界では、いざという時、手元のカードが多い方が有利なのだ。

「ダンスの引き出しは、多いほどいい・・・」

悦子は、田口に電話すると、北新地のクラブの掘り出し物件を探すように指示した。

.....

順子が、北新地に『モナミ』をオープンして1年が過ぎた。

昇平は実家に預けて、それまでのマンションを引き払い、店から徒歩圏内の2DKで一人暮らしている。

人からは「子供と離れて暮らすのは辛いでしょう?」と同情されるが、順子は、それは少し違うと思っていた。

確かに、母性本能というのは存在するのだろうが、それは条件が整った環境の下での話だ。

苛酷な状況に暮らせば、母性本能を呼び覚ますスイッチさえも入らず、子供を虐待したり、自身が精神の疾患に病んだりする。

順子は、仕事柄、そういう事例を沢山目の当たりにしてきた。

だから、昇平と自分のために、別れて暮らす道を選んだのだった。

それに、水商売の女で一生を終わりにしたくなかった。

そのためには、時間を惜しんで働いて、お金と力を蓄えなければならぬ。

自分のビルを持って、そのテナントに多様な美容関連の店を入れて、そこに出向けば、エステからパーマ、岩盤浴からフィットネスまで、日帰りでフルに楽しんで綺麗になってもらえるアミューズメント施設をつくりたかった。

## 最終章

悦子は、中国での手術を無事終えて帰国後、療養中の身だが、既に来年の市議会議員選に向けて周到な準備を始めている。

時々『モナミ』にも顔を見せて、人的交流の開拓に余念がない。

悦子を見ると、同じ女性として複雑な思いだが、いつそ、愛とか恋とか湿っぽいものにとらわれない、ふっきれた自由さが羨ましい。

悦子の辞書には、おそらく“献身”なんて言葉はないだろう。

自身の野望のために、闘志をむき出しにして挑み続けている。

悦子は頭もきれいし、そこそこ美しくもある。

力強い言葉で畳み掛けるように話し、これと決めた獲物は必ず攻め落とす。

類まれなる集中力で、何時間でも途切れずに仕事に没頭できる。

悦子は、政治の世界でも、きっと成功するだろう。

.....

中井は、可愛そうだった。

隆介の遺産相続から弾き飛ばされた上、斡旋収賄罪だなんて寝耳に水の容疑をかけられて、混乱し憔悴した。

本人は、事件には全く無関係だと主張し続けたが、証拠物件が次から次へと出て来たらしい。

悦子に渡した中井とのやり取りのテープも、その過程で何かに利用されたのだろうか？

少し、心が痛む。

中井は、逮捕される直前に行方をくらまし、それ以降、消息がつかめなくなっていたが、先日、ミナミの公園前にBMWをとめ、車内に排気ガスを引き込んだ自殺体で見つかった。

うつすらと顔に赤味がさした綺麗な死に顔で、ロレックスの時計をしていたそう。

店に来た議員秘書が言っていた。

選挙区内で不幸があれば、弔電を打ったりするのも彼らの大事な仕事のうちだ。その手の情報収集は、恐ろしく早い。

生前、中井と話した折、福井の出身だと言っていたことを思い出す。

「どんよりと鬱陶しい空が嫌で、病気の母さんが泣いてとめるのを振り切って、大阪に出て来てしまった」と言っていた。

「せっかく明るい空の下に来れたのに、また暗いところに戻らなあかんのやね、中井さん」……

この世界で生き延びるには脆弱すぎた中井の短い人生に、順子は、そっと手を合わせた。

……

物心ついた時から、順子はずっと、用心深く人生を歩いてきた。

在日ゆえの不条理なペナルティを背負いながら、女ひとり、よくここまで昇ってこれたな……と思う。

騙されて、裏切られて、辛いことの方が多し半生だった。

それでも、這いつくばって生きてきた。

だけど、これからは、今までと違う人生を思いっきり生きてみたい。

もう2度と、隆介と恋に落ちた時のような目くるめく時間は訪れないだろう。

それでも、恋を引き寄せ夢を追って、想定外の人生を探して歩いていく。

「隆介、これからも私のこと、ずっと見ててね！終わりまで・・・」

順子は、形見にもらった隆介のロレックスに軽く口づけた。

前編 おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0446b/>

---

欲望の報復

2010年10月8日23時16分発行